

# 第14回「日本語大賞」

テーマ 私が<sup>だいじ</sup>大事にしている言葉

高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

## 「貴方の言葉は八年越しに、」

千葉県

和洋国府台女子高等学校

二年 和佐間 芽弥

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「貴方の言葉は八年越しに、」

和洋国府台女子高等学校 二年  
和佐間 芽弥（わさま・めみ）

「人生山あり 谷あり」なんて言ったもんだが今の所私の人生は「人生谷あり 壁あり 果たまには福もある」なんてものである。まだ十六歳の若もんが何を言っているんだと、大人たちは思うだろう。まだ高校生の子どもが人生語るなんざ一〇〇年早いと思っっているが今からお話する私の、和佐間芽弥の今までの人生十六年の中の思い出話の一つをちよつと聴いて行って欲しい。

私は現在関東のとある一軒家で母方の祖母と私の二人で暮らしている。決して裕福とは言えぬ暮らしかれども、他の誰よりも楽しく穏やかで幸せな日々を送っている。記憶すらまともに残っていないが、私が二歳だった頃までは父、母そして私の三人家族で暮らしていたそうだが、私が幼稚園に入園する三歳の頃両親は離婚し、私と母は祖母の家にて三人で暮らすこととなった。三人で暮らした日々はもうそれはそれは本当に幸せであった。毎日がキラキラして輝かしく、母と祖母のまるでコンペイトウでも煮込んだような甘ったるい愛情の中過ごした日々は私の今までの人生の中で最も幸せだったときだと言えてしまうほどである。そんな夢のような時間は永遠に続くはずもなく突如終わりを告げた。母の病死である。病名はくも膜下出血。母は父からまともに振り込まれない養育費の代わりにと、皿洗いのパートからエクササイズの講師、キッズダンススクールの先生などをして一年間三六五日、一生懸命朝から晩まで働いていた。祖母と赤く腫れた目をこすりながら「疲れがたまっていたんだよ。」なんて話をした一週間と三日後、母は天国へと旅立った。葬儀が終わったのはちょうど誕生日の二日前の出来事だった。これは私が小学校三年生の時の冬の出来事だ。

そこから私は、寂しくなるとひたすらに母との思い出に浸るようになった。母と一緒に映っているアルバムをあさったり、まだサイズが大きい母のお下がりのTシャツを着たりしながら一日を過ごした日も多かった。気づけば私の部屋は壁一面に母との思い出の写真で埋まっていた。幼稚園の頃誕生日だからとズル休みをして遊びに行った東京デイズニールランドの時の写真や母のダンススクールの発表会の時の写真、七五三の時の写真に、葬儀で使われた薄桃色の着物を着た母の写真も飾ってある。

ひたすらに母の姿を追い求めていた小学生のときに比べ、時間の経過とともに気持ちも落ち着いてきた中学生の時のこと、家の大掃除で襖の奥を片付けていたら懐かしいノートが二十冊近く出てきた。それらのノートは全て母との交換日記だった。もうすでに処分されていたと思っていたので嬉しくてたまらなかった。五年ぶりに見た母の字が、母の言葉が、そこには綴られていた。私の読みづらいガタガタの字にも一言一言コメントを残してくれる優しさが染みた母の文字が愛おしくてたまらなかった。私は日記帳を辿っていくうちに二十冊近くあるノートのどの冊子にも必ずある言葉があるのに気づいた。その言葉は母の口癖でもあった。

「メミはママにとっての大切な宝物です。いつもありがとう。大好きだよ。」

この一言は今でも私の中の奥底に深く、深く残っている。母が生きていた頃、母がよく私に言ってくれたこの言葉は、八年間たった今でも私を支えてくれる。あの日記帳は私と母の決して消えない思い出だ。時間が経っても、そこに貴方は居なくても、言葉はきちんと届く

んだ。私の人生、今の所「人生谷あり 壁あり まあたまには福もある」なんて感じだけど、これからもっと幸せなこと、辛いこと、大変なことがあると思う。その度に思い出すのは、この言葉だろう。私の言葉はいくら時間が経っても、もう本人には届かない。だけど、届いて欲しいと願いを込めて、私から母に言葉を贈りたい。

ねえママ、聞いて。私身長一六〇cmでもうママの背を超えたんだよ。

ねえママ、聞いて。お勉強も表彰されちゃうぐらい頑張っているんだよ。

ねえママ、聞いて。私はこれからもずっとママの大切な宝物だし、ママもずっとこれから私の大切な宝物だよ。

ねえママ、聞いて。次逢うときいつもの優しいあの笑顔で笑って私を抱きしめて。